

五月二十一日

「古人曰く、かいこおきてくわをはむ 蚕起食桑といひまして」

よつ、というかけ声と共に、菊がガラス瓶を調理台に乗せた。密閉されたガラス瓶は、一抱えほどもある。

調理台はこじんまりとしたカウンターのすぐ奥にある。木製の天板は、シンクの隣にあるにもかかわらず、良く乾いて清潔だった。

掃除も下ごしらえも済み、後は開店を待つばかりという時間帯だった。

巨大なガラスの密閉瓶の中でとろりと揺れる、透き徹った紅玉色の液体に、アルフレッドが目を輝かせる。

「WOW、イチゴシロップ！ 今日のはかき氷なのかい？」

菊が、微笑んで頭かぶりを振る。

「まだ五月ですよ。流石にかき氷には早すぎます」
先ほど言ったでしょう、蚕起食桑と。菊の言葉に、アルフレッドは笑顔のまま、頭の上に巨大な疑問符

を浮かべる。顔にははつきりと『そんなこと言ったっけ？』と書かれている。

流石はアメリカカン。表情だけでこれだけ考えていることが丸わかりになるのは、ある種の才能だ。日本人にかかれれば、アメリカ人などすべてサトラレだ。興味あること以外は全て聞き流し、記憶の片隅にも残らない。

穏やかさが信条でありまた平素の性質でもある菊は、アルフレッドの態度に、表情ひとつ変えない。アルフレッドのゴイングマイウェイな馬耳東風イヤーにもすつかり慣れたものである。

菊が丁寧な手つきで密閉瓶をあげる。

「菊」

「何ですか？」

「さっきのもう一度言つてよ」

「蚕起食桑」

「カイコオキテクワヲハム」

アルフレッドが口の中で音を転がして、首を傾げる。

「何の呪文だい？」

「七十二候……ああ、まあ、季節を表す言葉の一つ